

言語の多様性に向けて：ハワイ・クレオール英語の歴史と現状

井上 彩

2011 年度フルブライト中部同窓会・EWC 中部同友会講演会

愛知大学車道校舎本館 13 階 第 3 会議室

2011 年 5 月 29 日

今日は、諸先輩方の前でお話をさせていただき機会を与えていただき本当にありがとうございます。まず「言語の多様性」という視点を出発点としてお話させていただきたいと思います。このように「多様性」と言うと、生物的多様性という概念がまず思い浮かぶことと思いますが、近年「多様性」という視点から生物の種類に限らず社会的文化的なあらゆる分野で活発な議論がなされているように感じます。私の専門分野である言語学においても言語の「多様性」を守る、つまり、世界に数千（5000 から 8000 のあいだであろうと言われていた）ある言語のうち危機に瀕している言語が半数はあると推測されているのですが、そういった言語の復興及び記述に世界中の多くの言語学者達の努力と熱意が費やされています。

私は 2001 年から 2005 年までディグリー・フェローとして、また 2006 年から 2008 年まではスチューデント・アフィリエイトとして米国ハワイ州のイーストウエストセンターに所属し、ハワイ大学大学院言語学科博士課程での研究を支援していただきました。イーストウエストセンターの支援なくしては野外調査をも含む長期にわたる博士課程での研究を続けることはとても困難であったであろうと心から感謝しております。博士論文“Copula Variability in Hawai‘i Creole”ではハワイで話されているハワイ・クレオールの変異について研究いたしました。ハワイ・クレオールはその名前が示すようにクレオール化を経て言語として成立した言語であるという点において非常に珍しい種類の言語変種です。クレオールとは、非常に簡単に言うと、複数の言語の接触によって言語の要素が混成することによって新たな言語が生まれるような状況があった場合にそこで生まれた言語をさします。しかし、ハワイ・クレオールは言語学の外では、たとえばハワイに関するガイドブックなどには一般的に「ハワイ方言」「ハワイ英語」「ピジョン」などと称されていることが多いようです。こういった呼称の是非については社会言語学では大きな議論があるのですが、今日はそれについては踏み込まず、話を進めさせていただきます。

今日は、イーストウエストセンターの同窓生の皆様が共通して過ごしたハワイで成立し使用されているハワイ・クレオールについての概略を簡単にご紹介させていただき、さらにこういった言語の存在が「言語的多様性」という問題にどういった視点を投げかけ

るのかということをお話しさせていただきたいと思います。なお、今日ご紹介するハワイ・クレオール¹の歴史的背景に関する事実、また例文などすべて Kent Sakoda と Jeff Siegel による『Pidgin Grammar: An Introduction to the Creole Language of Hawai‘i』からの引用であることをあらかじめお断りしておきます。Sakoda と Siegel による『Pidgin Grammar』という本は、一般読者を対象としてはいますが、クレオール言語学第一線の高度な研究成果を基礎とした上で非常に平易な言葉で書かれたハワイ・クレ奥ールの文法を紹介する本で、とても読みやすく、ハワイ・クレオールに興味を持っていただけた方には是非ともご一読をお勧めいたします。

ハワイ・クレオールとは主に英語語彙をベースにしたクレオール言語（混成言語）で、ハワイ州では広くピジン(“Pidgin”)と呼ばれており、約 60 万人の人によって話されています。その使用は主に私的な空間に限られることが一般的であり、今でもいわゆるブローケンイングリッシュだと思われることがあり、かつては言語的差別を受けることもありました。一方では、ハワイ・クレオールを話すことすなわちハワイ生まれ、ハワイ育ちであることを裏づけするため「ローカル」であることのアイデンティティ・マーカ―と考えられることもあります。

ハワイ・クレ奥ールの生まれたハワイでは、紀元 200 年ごろから 400 年ごろにポリネシア人がハワイ諸島に居住して以来、ハワイ語が話されてきました。そのハワイ諸島に 1778 年にヨーロッパ人が訪問してから他の言語との接触が始まります。1790 年ごろから 1810 年ごろハワイは中国とアメリカとの間の毛皮貿易の際の停泊地となり白檀の貿易と捕鯨が栄えました。1835 年にハワイに最初のサトウキビプランテーションが設立され、労働者の需要が高まるものの、1848 年の段階でポリネシア系であるハワイ人人口は 88,000 人しか残されていませんでした。そのため外部からプランテーション労働者を調達する必要性が生じたのです。

その後 1850 年代から広東語話者を中心とする 4 万人弱の中国人、2 万 5 千人弱のポルトガル人が移民し、次いで 1884 年から 1924 年の間に約 20 万人の日本人が契約労働者として渡布し、1907 年から 1930 年ごろには約 10 万人のフィリピン人が移民してきました。また人数的にはこの四つのグループほど多くはないにしろ、他のパシフィック諸島やプエルトリコ、韓国からも多数が主にプランテーションでの労働者として移民してきました。

ハワイ人、中国人、ポルトガル人、日本人、韓国人、そしてフィリピン人という異なる言語を話す集団がともにプランテーションで働く状況の中で、まず相互のコミュニケーションの必要性からピジン英語が生まれました。その後プランテーションで生まれた子供達は他の子供達とピジン英語を話し、家庭では家族とそれぞれの言語を話していました。この世代が成長すると、ピジンは彼らの主要な言語となり、ピジンをその子供達に

伝えていきます。徐々にピジンがハワイで生まれたほとんどの人の母語となっていくました。ピジンがクレオールへと変化するときにはその文法が変化します。ピジンの場合は第2言語として使用され母語の影響が強いので、母語が異なると文法も異なっていることが多いのですが、クレオールとなると第1言語であるゆえに話者による文法のばらつきが少なくなります。

こういったハワイ・クレオールの例に見られたように、通常クレオール言語は、その前段階であるピジンのステージを経ていることが多いのですが、一般的にピジンというのは通常は3つ以上の複数言語が関わる言語接触の状況において、優勢言語（ハワイの場合は英語）を十分に学ぶ機会がないままにコミュニケーションの必要性に迫られて異なる言語の話者たちが即席の混声言語を創り出した場合に生まれます。ピジンはあくまでも異なる第一言語を話す話者が一緒に働くときに意思の疎通ができるように必要最低限の内容を伝え合うことが目的で、語彙も少なく、また話者の人種的なバックグラウンドや第一言語の違いによって異なる文法を用いていることも多々あります。

しかしその後ピジンを話す世代に子供が生まれ、ピジンと親の第一言語とを同時期に習得する第二世代が現れると、第二世代はピジンのネイティブスピーカーであるということになります。こうしてピジンがネイティブスピーカーを得ると、ピジンはクレオールという新たなステージとなります。必要最小限の意思の疎通が目的であったピジンの役割とは異なり、第一言語としてのクレオールはその語彙も機能も拡張され、文法も固定化されます。今日はハワイ・クレオールの例を用いて、実際にピジンの段階とクレオールの段階とで文法がどのように違っているかをご説明したいと思います。

ハワイ・ピジンの例文

(1) Luna, hu hapai? Hapai awl, hemo awl

Foreman, who carry? Carry all, cut all

‘Who’ll carry it, boss? Everyone’ll cut it and everyone’ll carry it’

例文(1)はフィリピンからの移民でビサヤ語が母語であるハワイ・ピジンの話者による発話例で、主語(awl)が動詞(hapai、hemo)の後に現れるというVSO(動詞—主語—目的語の語順)を基礎語順とする言語であるフィリピン諸語の特徴が見られます。

例文(2)は日本からの移民で日本語が母語であるハワイ・ピジンの話者による発話例です。

(2) da pua pipl awl poteito it

the poor people all potato eat

‘The poor people ate only potatoes.’

目的語 (poteito) が動詞 (it) の前に現れるという日本語の特徴が見られます。

一方、ハワイ・クレオール文法ですが、いくつかある特徴的な文法の中から過去時制マーカーである *wen* の用法をご紹介します。クレオールの場合はピジンとは違って人種や第一言語が異なっても、皆が同じ文法を用いるのが一般的です。

ハワイ・クレオールの例文

(3) Wi wen mek wan dres.

we past-tense make one dress

‘We made a dress.’

(4) Herod wen like kill him.

‘Herod wanted to kill him.’

(5) George wen go Vegas.

‘George went to Las Vegas.’

例文の (3) から (5) に見られるように、標準英語では動詞の活用変化によって過去時制を示しているところを、ハワイ・クレオールでは、*wen* という過去時制マーカーと動詞の原形を用いて示しています。

例文 (1) から (5) をご覧になって、表記の仕方の違いにお気づきになられた方もおありかと思います。(1) から (3) の例文は標準英語のスペリングにとらわれず、ピジンまたはクレオールの音声特徴を直接とらえて表現できるような表記法を用いていますが、(4) と (5) では標準英語にはないクレオール独自の語である *wen* を除いては標準英語のスペリングを使用しています。前者の表記法ではクレオール言語としての独自性を表現することができ、また一つの音には常に一定の記号を用いることからその言語になじみのない人にも正確な音価を伝えることができますが、一方では慣れていないと非常に読みにくいというデメリットもあります。後者の標準英語の表記法を用いると、読みやすいのですが、どうしても標準英語の発音や文法に引きずられた理解を招きがちです。

ハワイ・クレオール言語はそのほとんどが英語起源です。しかし、*akamai* ‘smart’や *keiki* ‘child’などハワイ語起源のものや、*bachi* ‘punishment’、*musubi* ‘rice ball’などの日本語起源ものも多くあります。まれにポルトガル語起源の語彙もあって、*malasada* ‘kind of doughnut’ はポルトガル語からきています。また、発音やアクセント、イントネーションに関しては、クレオールの段階となると発音やアクセントなどには著しい特徴があり、たとえばハワイ以外のアメリカの地域からハワイにきた標準アメリカ英語の話者にハワイ・クレオールのことを尋ねてみると、たとえばオーストラリア英語やニュージーランド英語など、世界の他の地域の英語との比較で考えると、それよりはもっと標準（アメリカ）英語から距離があるように聞こえる、という答えを聞くことが多くありました。

博士論文“Copula Variability in Hawai‘i Creole”では特にハワイ・クレオールの使用の現状にフォーカスをおいて、ハワイ・クレオールの母語話者による自由な発話を分析し、コピュラー動詞の変異を統計的に分析しました。問題意識としては、ハワイ・クレオールはプランテーションでの共通語という役目を終え、廃れつつあるのか、その使用は地方方言の典型的な使用者としてよく言われるように年配者や男性のみが使用し、若者はもう使わなくなっているのか、という視点で考察しました。ハワイ・クレオールは過去の存在なのか、それとも現在でも若者を含む幅広い年代によって使われ、今後も発展していくべき存在なのか、という問題意識です。それを調べるためにハワイの四つの異なる地域、すなわち、オアフ島（都市部と地方の2地域に分ける）・ハワイ島・カウアイ島において、どのくらい、またどのようにコピュラー動詞が欠落しているのかを統計的手法を用いて比較しています。現代のハワイで実際に話されているハワイ・クレオールのデータの分析の結果、ハワイ・クレオールはオアフ島の都市部ではその使用が減っているかもしれないが、それ以外の地域では現代でも活発に使われている言語であるということがわかりました。また、地域差と性差の相関を考慮してみると、都市部の女性話者はハワイ・クレオールをあまり使用しない傾向にありました。しかし、都市部以外では多少そのかたちを変えながらもハワイの「ローカル」であることのシンボルとして幅広い年齢層のハワイ出身者によって今日も広く使用されています。

ハワイ・クレオールへの言語態度が今後の課題であると言えます。ハワイ・クレオールはその成立背景とその後の緊密な英語との関係により、常に語彙供給言語である英語との関係で蔑視されてきました。例えば、ハワイ・クレオールはまっとうな言語などではなくただの訛った英語である、とか、ハワイ・クレオールしか話さない人は怠け者である、などといった誤った認識が公的機関によっても持たれていた時代もありました。現在ではハワイ・クレオールへの言語態度もかなり変わってきてつつありますが、こういったハワイの過去の事例を学ぶと私たちは言語態度というものがいかに私たちの言語使用に大きな影響を与えているかということに気づかされます。

最後に、今日、言語の違う人々との接触がますます増えた社会状況の中で、異質な言語を話す人々がいかに共生していくかが、今後のグローバル社会の切実なテーマになると思われます。言語の違う人々が自分たちの言語を大切にしながら同時にお互いを尊重し共生することをめざすのが言語権の発想ですが、これはたとえば英語と日本語との間、中国と日本語との間、などの異なる言語間だけの問題ではなく、クレオール言語と語彙供給言語との間、標準言語と方言の間、また、母語話者による言語使用と非母語話者による言語使用、といったありとあらゆる多様な言語の使用に応用されるべき発想だと考えられます。ますます多言語との接触が増えつつある現代社会に生きる一員としていたずらに多様性を優劣として認識し差別的発想の源とするよりは、多様性を豊かな言語的資源として認識しその豊かさを享受するのがより生産的な言語態度だと言えるでしょう。

参考文献

Sakoda, Kent and Jeff Siegel. (2003). Pidgin Grammar: An Introduction to the Creole Language of Hawai'i. Da Bess Press.